

入宋僧喬然の帰京に関する覚書

佐々木 令 信

一
入宋僧喬然が、宋商鄭仁徳の舶で帰朝したのは、寛和二年（九八六）のことである。

東大寺僧喬然の生涯の念願は、京都郊外の西北に位置する愛宕山に、中国の五台山に倣って、五台山清凉寺を建立し、戒壇を建置して、東大寺の仏教をかつてのように日本仏教の中心とし、もって釈迦の遺法を興隆せんとすることであった。

愛宕山^①は、京都の西北にそびえる九二四メートルの高峰で、承和三年（八三六）には七高山の一にかぞえられており、愛宕聖が定住し、山上の愛宕社は貞観六年（八六四）従五位下を授けられ、同十四年（八七二）従五位上、元慶三年（八

七九）従四位下を授けられるなど、無名の山伏によって開かれた愛宕山は、九世紀中葉には国家的信仰をえていた。喬然が、天禄三年（九七二）閏二月三日午時、東大寺僧として義蔵と誓った現当二世結縁手印状には、

興隆釈迦之遺法、然後第二生必兜卒内院、見聞仏法、第三生共随從弥勒、下生闍浮、聞法得益、深增菩薩大悲之心、随願往来十方浄土、疾証無上正等菩提、と願って、愛宕山を点定、同心合力してここに伽藍を建立しようと立誓したことがみえている。

喬然は、慶滋保胤が草した願文にも記されているように、天禄（九七〇―九七二）以降、五台山巡礼を念願としており、現当二世結縁手印状を記した天禄三年には、三十五歳であった。

五台山に関する知識は、入唐僧によって伝えられ、円仁の『入唐求法巡礼行記』の記事などにみえるが、十世紀半ばをすぎ、齋然のころには、中国の文殊菩薩五台山示現説が日本の僧侶に対して強い魅力を有し、五台山巡礼の意欲をかきたてていた。

齋然が中国に渡ったのは永観元年(九八三)八月で、その入宋にさいし行なった常住寺における母のための逆修の願文のなかで、

齋然願光參五台山。欲逢文殊之即身。願次詣中天竺。礼釈迦之遺跡。

と記している。齋然は宋の五台山に巡礼しその文殊信仰を将来したが、愛宕山に清涼寺を建立しようとしたことは、東北で京都を鎮護する比叡山を意識してのことであり、愛宕山が京都の西北の角に位置していることによる。

『宋史』列伝卷二五〇には、日本僧として宋太宗に謁見した齋然の様子が詳しく記されている。齋然は宋太宗の知遇を得、法濟大師号、紫衣、宋版一切経などを賜った。帰朝にさいして齋然の齎した文物は、五台山清涼寺の本尊として安置すべく模刻し請来した優曇王所造栴檀釈迦瑞像など多きにわたるが、宋版一切経だけでも五百匣に及ぶものであった。

そうした巨多な文物を携えて齋然の一行が当時貿易を管理していた大宰府を出発したのが、『続左丞抄』によれば、寛和二年十一月七日、淀川を經由して京都にほど近い山城国河陽館(山崎津)に到着したのが、翌三年(九八七)正月十七日であった。さっそく入京して齋然がなすべきこと、それはかつて齋然と義蔵が東大寺僧として立誓した愛宕山伽藍建立という現当二世結縁手印状の具現化に他ならなかった。

いま帰京前後の齋然について論じようとする場合、一つの手がかりは藤原実資の日記『小右記』にみえる、つぎのような記載である。

- (1) 寛和三年正月廿一日条。
入唐師齋然昨夕入洛云々、即參撰政殿云々、
- (2) 寛和三年正月廿四日条。
早朝罷出、入唐僧齋然来談、触事驚耳、不可敢記、
- (3) 寛和三年二月十一日条。

内蔵頭・権中将相共拜見入唐僧齋然畢所隨身佛經、初運置經論於寺給宣旨、運移蓮台寺、山城・河内・摂津等夫持運云々、宣旨云々、最初有七宝合成塔、塔中籠佛舍利、即載與中人担之、其前雅楽寮發高麗樂、相次担納摺本一切経論之五百合匣、一人担二百、匣道路

人相諍担之、誠為結縁、叡後又有御輿、安置白壇五尺
 釈迦像、雅樂大唐樂、其次齋然着用袈裟、七八人僧等
 相共歩行相從、其道自朱雀大路登北、自二条大路東折、
 自東大宮大路登北、自一条西折、到蓮台寺云々、人々
 云、於朱雀門前礼橋下僧廿人出来、持高麗、奉讀佛經
 云々、

(4) 寛和三年二月十六日条。

殿上人相卒詣蓮台寺、奉拜唐佛經等、帰参内、候宿、
 (5) 寛和三年二月廿四日条。

参院、黄昏罷出、右大臣・左右兩將軍・他公卿等相卒
 詣蓮台寺、右府修諷誦、砂金廿両、香爐・佛器等云々、
 (6) 寛和三年二月廿九日条。

参内、候宿、撰政殿今且被参蓮台寺、被拜唐佛云々、
 故良源大僧正門徒僧綱以下阿闍梨已上参入陣外、令奏
 諡号賀表、已時許大震、齋然師絵像・七宝合成塔等令
 覧皇太后云々、

(7) 寛和三年三月二日条。

請六箇日假、内蔵頭相俱参蓮台寺、奉拜唐佛、左中弁
 ・右中弁・前加賀守・景齊・永年・知章・信公・懐光
 臣等同以朝相伴、聊儲食物差齋上人等、衛黑退帰、修
 理大夫今夜来宿、

(8) 寛和三年三月十一日条。

剋限参内、候宿、於撰政御宿所任僧綱、并被定所々別
 当事、僧都陽生・禅偷・覚忍・三人辞退云々、其替被
 任正算法性寺座主、興良御祈願所・真喜勞云々興福寺别当、以上三
 人僧都、禅徴・勸命、以上二人律師、入唐僧齋然給法
 橋位、若依入唐帰朝欽、

(9) 永延元年四月廿六日条。

参内、続参院、撰政被奉唐佛供菓子五盛・作花一壺、
瑠璃 入夜罷出、
壺也

右にあげた事例は、齋然の帰京前後に関するもので、
 『小右記』に記載されているものを、年次順に摘出したも
 のである。実資の日記『小右記』は、周知の如く、平安中
 期における一等史料である。その記述は五十九年間にわた
 り、現存するものでも天元五年(九八二)から長元五年(一
 〇三二)までで、この間の散佚を省いても三十七年に及ん
 でいる。公卿日記の性格上、宮廷関係の有職故実に詳しい
 ことは勿論であるが、天皇・公卿・僧侶・聖などに関する
 出来事、天災人災の記録やそれらについての感想など興味
 深い記載も多い。いま課題の齋然に関していえば、天元五
 年六月八日条を初見として『小右記』には十五日登場する。

ここで齋然の帰京前後に関する記事を摘出して引用したのは、『小右記』に実資の齋然に対する思いいれが存在することに気づくからである。

したがって本稿では、『小右記』の齋然の帰京に関する記載を基礎に据えて、齋然が愛宕山大清涼寺造営の事業を遂行していくなかで諸問題を考察していくことにしたい。

二

寛和三年二月十一日、齋然が宋より齋した優填王所造釈迦如来像、宋版摺本一切経などの入洛奉迎が行なわれた。すなわち、前章『小右記』(三)の史料である。

仏法僧の三宝を兼ねそなえた行列が都大路を歩き、京都の上下の大歓迎をうけた。

行列は、朱雀大路を北に登り、二条大橋より東に折れ、東大宮大路より北へ登り、一条大路を西に進んで蓮台寺に入るコースであった。行列の先頭には、雅楽寮が高麗楽を奏で、最初に輿にのせて担がれて行くのは、七宝合成の塔で、塔の中には仏舍利が籠められていた。つぎに齋然が帰朝にさいして宋太宗より贈られた勅版摺本一切経論が納められている匣がつづき、全部で五百匣、匣を担ぎ持ち運ぶのは山城、河内、摂津国などの人夫であった。都大路でこ

の行列を迎える人々は、相あらそって一切経論の匣を担がせてもらい、三宝との結縁をなした。つぎに経のあとには御輿があり、白檀五尺釈迦像が安置されていた。その仏像のうしろには雅楽寮の大唐楽が相したが、そのつぎに、法済大師、賜紫衣の入宋帰朝僧、齋然が袈裟をつけて行進し、齋然のあとには七八人の僧侶が相従っていた。その七八人とは、齋然の入宋に随行した嘉因、定縁、康城、盛算、祈乾、祈明とそして義蔵ではなかったか。

ところで、齋然と蓮台寺との関係についてどのようなかんながえたらいいのであろうか。

蓮台寺には齋然の齋した文物が運ばれた。齋然は愛宕山に清凉寺を建てることを念願しており、河陽館(山崎津)↓蓮台寺↓愛宕山清凉寺という見通しのもとに、ひとまず蓮台寺に落ちつくことになったのであろうが、一〇世紀の平安京内外の諸寺のなかで蓮台寺に運ばれたことはいかなる意味をもつのであろうか。

ここにいう蓮台寺は、蓮台野の地に東密教団の寛空が開創した寺で、千本十二坊町にある上品蓮台寺がそれにあたる。

蓮台寺について寺伝では聖徳太子が母の菩提のために草創し、宇多法皇が中興したというが、実際には『日本紀

略』天徳四年（九六〇）九月九日条に、

権僧正寛空（養北山蓮台寺）。

とあり、『仁和寺諸院家記』顕証尊寿院本に、

古徳記云、天徳四九九、供養、願文云、是則師資相伝之精舎也、

と記されており、天徳四年に寛空が蓮台寺を開創したといふべきである。

寛空は姓は文室氏、河内の人、円行、神日、観賢の三大老に灌頂法をうけ、延喜八年（九一八）嵯峨大覚寺で宇多法皇に重ねて灌頂を稟けた。天暦二年（九四八）東寺長者。同四年（九五〇）金剛峯寺座主。同六年（九五二）仁和寺別当。同一〇年（九五六）法務も兼ねた。康保元年（九六四）僧正。宮中に召されて仁寿殿や真言院で息災などのために孔雀経法を修法すること八度におよび悉く法験をあげたという。

元慶元年（八八四）の誕生であるから、蓮台寺開創の天徳四年に寛空は七十八歳であった。蓮台寺に常住したらしく、『本朝高僧伝』には、

空居（洛北蓮台寺）。故呼（蓮台僧正）。

とみえている。康保三年（九六六）二月六日に寛空が蓮台寺で入滅したと伝えている。

寛和三年、齋然の帰京の段階ですでに寛空は亡くなって

おり、入洛奉迎のときの蓮台寺別当が誰であったか不明である。おそらくは寛空以降も蓮台寺はその門流によって占められていたことが推測されるのである。河陽館↓蓮台寺というコースをとるについては、寛空の門流、東密教団がかかわっていたとかがえられる。

そこでまず齋然の伝記についてごく簡単にふれておくことにしたい。

昭和二十八年七月二十九日、齋然が宋より齋らした清涼寺釈迦如来像に胎内納入品があることが発見され、翌年二月四日からの総合的な調査の結果、彼の生涯や業績で不明とされていた多くのことがわかった。

胎内納入品のうちでいま、問題としたいのは、現当二世結縁手印状で、齋然の入宋、優填王所造釈迦像将来、五台山清涼寺建立の根源となったものである。

その中に、

伝燈法師位齋然（天慶元年戊戌正月廿四日誕生、俗姓秦氏、天徳三年五月十八日受戒、師主寛静、

伝燈法師位義藏（天暦四年庚戌七月十五日誕生、俗姓多治氏、天徳二年十月廿二日受戒、師主法藏權少僧都、

と記されている。

従来、齋然の伝記は辞典に、その前半生について、

平安時代中期の東大寺の僧。京都の人。藤原真連の子。幼時東大寺に入り、東南院の観理に三論を、石山寺元

杲に密教を学ぶ。^⑧

とあるのが一般的であった。

齋然の生年についても没年が長和五年(一〇一六)と判明しているのみであったが、いま現当二世結縁手印状によって、齋然が天慶元年(九三八)正月廿四日に誕生したことがわかる。同じく釈迦如来像の胎内納入品の中に、齋然生誕書付、一枚、紙本、墨書、縦一四・二センチがあり、そこには、

(表)

承平八年正月廿四日の

ひつじ□□のときにむ

(裏)

まる□□とこ丸

とあり、五臓とともに発見されている。ここにいう承平八年(天慶元年)正月廿四日は、齋然誕生の日である。この書付は仮名でもっとも古いといわれており、齋然の母が、齋然の臍の諸にしろしたものを入宋にあたって齋然が持参し、優填王所造釈迦如来像の模刻の完成とともに胎内に入れたものである。

齋然の出自については、『元亨釈書』『本朝高僧伝』『続伝燈広録』『宋史』などを踏襲して、従来藤原氏とされ、

伝記でもっとも詳細な故西岡虎之助氏の論文^⑨においてもそうである。しかし現当二世縁手印状の発見により、齋然の出目が秦氏となったのである。

とすれば、入宋にあたって齋然が母のために逆修をした寺院が、秦氏と関係の深い常住寺であったことも了解できることになろう。

師主について。齋然が三論を東大寺東南院の観理に習い、密法を石山寺元杲に稟け、そしていま現当二世結縁手印状によって、齋然が天徳三年(九五九)五月十八日、二十三歳のときに、寛静を師主として受戒したことがしられるのである。

齋然が授戒した天徳三年は、寛空が蓮台寺供養をした前年で、師主寛静は五十三歳であった。

寛静^⑩の伝に關してかれの生涯や事績のなかでいま課題となるのは、東密教団における寛静と齋然ということであり、そのことについて『仁和寺諸院家記』恵山書写本が示唆的である。そこには、

西 寺 九条、東寺西也

寛静僧正 文屋氏、左京人、肥後守源浮子也、寛空同母舎弟也、則灌頂資、号西寺僧正、

又如意輪寺、寛平法皇御弟子、

一長者、東大寺別当、高野座主、天曆九年十二月九日、任東寺入寺、康保元年七月廿日、任権律師、同二年十二月廿八日、転正、安和元年三月十一日、任権少僧都、天禄二年十一月廿八日、加任二長者、同三年五月廿七日、拜堂、天延二年二月十九日、補高野山座主、同五月十一日、転権大僧都、貞元二年十月五日、任僧正、七十六、天元二年十月十一日、入滅、七十九、

と記されている。

右の史料で注目されるのは、寛静が寛空の受法灌頂の弟子であり、同母の舍弟であるとしていふことであろう。同様な記載は、『真言伝法灌頂師資相承血脉』『三宝院文書』『西院流血脈集』その他にも散見している。

清涼寺釈迦如来像の胎内納入品から現当二世結縁手印状が発見され、その中に天徳三年五月十八日、二十二歳の時に、奄然が寛静を師主として授戒し、寛静が蓮台寺開創の寛空の同母の舍弟であった。

そう考えていくと、東大寺僧奄然が寛空と何らかの交際があったとも推測されるのである。

いづれにしても、奄然は東密教団の寛空の弟子たちと密接な間柄にあったといわねばならないであろう。寛空の弟子の中で、つぎにそうしたことについて元杲を検討しておくことにしたい。

三

元杲^②は延喜十四年(九一四)の生まれ、左京の人。石山寺の淳祐付法の弟子で、小野流事相を、また師の告命によって、蓮台寺僧正寛空より広沢流事相をうけて、密教事相をきわめた。

康保元年(九六四)

天禄三年(九七二)

天元五年(九八二)

寛和元年(九八五)

の四度にわたって、詔によって神泉苑に請雨經法を修して験があり、

昔空海今元杲、誠是得請雨之法人歟^②

と当時評価を得ていた。

奄然は先にのべたごとく元杲に密教を学び、親密な間柄にあったことは、神泉苑祈雨にあたって奄然と元杲が称讃しあつて詩を唱和している事柄によつても推測されるので

ある。

『齋然元杲唱和詩集』は、天元五年に元杲が神泉苑で祈雨を行ない靈験があったのを齋然が讚え詩を贈ったもので、元杲もこれを和している。

故元杲大僧都祈雨御修法之時、齋然法橋作、奉感
神泉苑祈雨御修法有靈疫之什、

末資齋然

再感神泉請雨經、祁々甘雨滿池亭、鵲飛離早遊絲乱、
烏景隱雲瀉玉零、天子傾纓霑葉苑、闍梨結掌灑花庭、
法橋宜大師路、無熱蛇龍尚有靈、

弘法大師始修請雨經法、無熱池善女龍化現此池云々、
法橋兩度修此、天雨滂沱、人民感悅故云々、

忽改法橋字、敬為法眼字

齋然

神泉苑裏奇何事、喜雨滂沱幾淺深、高野大師流布昔、
醍醐法眼瀉瓶今、欣龍淵底化含水、濕雁雲中翳入霖、
若此生臨唐竺鏡、応言請雨法甘心、

奉和齋高才、感神泉苑祈雨御修法有驗之什、次上

韻、

愚老元杲

天雨答祈依轉經、蒼生誰仰亭々、密雲布処心弥至、膏

沢降時淚共零、感涙自落散零漫餘滋先滿畝、滂沱澄水不
過庭、神泉苑驗功非我、故云云、応是祖遠及靈、

重和改法橋字為法眼字之什、本韻、

僧都元杲

再感神泉祈雨詔、級階過分恐尤深、先年始奉成功後、
一代薰修被賞今、潤石灑來能散杲、帶雲霽去不為霖、

結願之後、兩日之間、雨猶不停、水既無容、干時諸
人疑若霖雨、然而普潤之後、雨猶不及、正之三日雨止雲
晴、天下皆礼、

適尋師迹雖弘道、愧變遠行隨從心、

相伴入唐之契、通事有憚、稽留故云々、^②

神泉苑請雨祈禱は東密復興期の所産であつた。^⑤蓮台寺開創の寛空、齋然の師主である寛静も神泉苑で祈雨をしてい

る。
元杲が早魃にさいして神泉苑祈雨で験力をしめすか否かは、齋然の愛宕山清涼寺建立の事業とは無関係でありえなかつたのである。

元杲は当時の真言宗の巨匠であり、先の『齋然元杲唱和詩集』にみられるように詩などもよくした。そのためもあつて、彼には門弟も多かつたが、注意されるのは元杲の付

法の弟子の中に、義蔵と覚縁がみいだされることである。

義蔵とは、天禄三年の現当二世結縁手印状において、奄然と愛宕山清涼寺の建寺を立誓したその人である。

義蔵については『小右記』永延三年(九八九)五月卅日条に、

昨日以阿闍梨清胤任権律師、真慧依病 清胤辭退替明普内供、前大

件明普真慧初師云々、義蔵法師為五台山阿闍梨、此度始置一人、前大僧都元杲、法橋齋然

等解文云々、

とあり、同じく六月四日条に、

義蔵来談云、五台阿闍梨法橋申請五人、其外又注別解

文申置義蔵、件解文前僧都元杲、法橋齋然加暑云々、

元杲彼山檢校云々、

と記されている。齋然は永延三年(九八九)延暦寺元慶寺の例に準じて、清涼寺に阿闍梨五人を給せられることを請うた。三密教法を勤修して国家を鎮護するといふのである。

これに対して清涼寺に阿闍梨一口を置くことが許され、その阿闍梨に元杲、齋然の推薦によつて義蔵が任じられたのであった。

いま注目しておきたいのは、鳴滝にかつて存在した般若寺についてである。般若寺がいま問題となるのは、現当二

世結縁手印状で齋然と東大寺の興隆を立誓した義蔵が般若寺別当をつとめて常住し、その別当職を義蔵に譲つたのが元杲であり、そうした動向が寛空の了解のもとに成立していたと推測されるからである。

義蔵は般若寺に住んでいた。そのことは『小右記』永祚元年正月二十三日条に、

遅明参般若寺。相遇義蔵師、聊有相□事。

と記されているように、永祚元年正月の段階で実資が般若寺に義蔵を訪ねており、また『本朝麗藻』(卷下)に、

冬日往詣般若寺。見故蔵闍梨旧房。中心之感触

緒難禁。遂書所懐寄覚上人。

左金吾

僧籠去後幾光陰。赴到那堪泉下心。林学釈尊雙樹色。水伝橋梵一言音。慈悲已断空留室。忍辱長薰独湿襟。殊恼君識否。娑婆旧契与年深。

と所収されている詩の解釈にもとづくものである。ここでいう作者の左金吾とは藤原公任のことであり、詩の題が般若寺と義蔵の関係を示唆している。すなわち、公任が詩にいう故蔵阿闍梨とは義蔵のことであり、覚上人とは義蔵入室の弟子で般若寺別当になった覚縁のことを指しているのである。

般若寺は、観賢が延喜年中（九〇一—九二三）に鳴滝西北山に開創した寺院である。蓮台寺僧正寛空は観賢の付法の弟子であり、晩年観賢が常住した般若寺によく出向いている。^⑧

観賢の没後、般若寺はその門流でしめられる。まず遍基がつぎ、そのあと観賢付法の弟子で唯一在世していた寛空が、般若寺を維持管理する責務を帯びたので、寛空は元果を般若寺別当に任じたものとかんがえられる。のち元果は、寛空の了解を得て義蔵を般若寺別当にしたものと推測できるのである。^⑨

寛縁は『僧綱補任』彰考館本に、

寛縁 東大寺隆深云、寛縁律師者、義蔵内供入室弟子、法蔵孫弟子也

と記されており、先の公任による詩にも寛縁が義蔵を師としたことがみえている。

義蔵と寛縁はよく行動を共にしている。『小右記』永祿二年七月廿日条に、

義蔵闍梨・寛縁上人来談之次云、唐人舟一艘千五百石着岸、法橋齋然弟子、去々年属唐人入唐、今般彼唐人及弟子法師等、同以帰朝云々、

と記されており、義蔵と寛縁が実資のところに一諾に出入

しているのを見ると、寛縁も愛宕山に近い般若寺で、師義蔵と齋然の愛宕山清涼寺建立に協力したのではないか。般若寺もいつの日からか五台山般若寺を名のっているのである。^⑩

いずれにしても、般若寺は仁和寺の別院であり、東密教団に属している。

齋然の愛宕山清涼寺建立の事業は、東密教団の寛空の弟子たちと密着した関係にあったようにおもう。ここでは、元果に関する一例をもって、若干の考察をなしたにすぎないが、以上のようにみえてくると、寛和三年二月十一日、齋然が宋より齋した優填王所造釈迦如来像、宋版摺本一切経などの入洛奉迎と蓮台寺の関係が、東密教団を媒介したものであると指摘できるのである。

四

蓮台寺にひと先ずおさまった釈迦如来像や一切経に対しては、多くの貴族たちの参拝が相つぎ、齋然自身も入宋帰朝僧としての箔に対して法橋位が与えられた。蓮台寺を詣でた貴族として先に引用した齋然入京前後の『小右記』^⑪ (六) (七)には、藤原実資、同為光、同兼家、同高遠、菅原資忠、藤原景斉、同永年、同知章、同信公、同懐光などが記され

ている。

齋然が将来した釈迦如来像の胎内納入品に「齋然繫念交名帳」一帖 紙本 墨書 縦六・五センチ 横四・七センチがある。

我念盧遮那

方坐蓮華壺

周币千華上

復現千釈迦

一華百億国

一国一釈迦

各坐菩提樹

一時成佛道

十方恒沙界

分身釈迦文

乃至同名釈迦

三世三千佛

无量十方

三世諸佛

菩薩声聞

天人

大朝趙烟

日本守平

王東宮太子

皇后康子

一品女親王

頼忠大臣

兼家大臣

為光臣

朝光臣

実資

道隆

兼道

諸僧俗

繫念人

男女一切

父親六親

皆守護

現当益

利

齋然は、文殊菩薩五台山示現説の高まりの中で、交名帳

に記載した人々の結縁を得て入宋巡礼をなしたのであるうし、同時に帰京後の愛宕山清涼寺建立の事業に後援してほしい人々であった。

齋然が宋から戻った時、交名帳に「兼家大臣」と記した兼家は摂政となっており、榮達を極めていた。『小右記』(三)の寛和三年二月十一日条にみえる行列は、朝野の尊崇をうけた。しかし子細に検討すると、齋然が山城国河陽館(山崎津)に着いたのは、正月十七日であり、入洛奉迎までの空白は何を意味するものであろうか。

ここではそれらを詳述する余裕はないが、山城国の運搬拒否という思わぬアクシデントに齋然は、早速入洛して、摂政殿(兼家)を訪ねた。それが先の『小右記』(一)である。(二)は齋然が実資第を訪問し相談した史料である。二月十一日、滞りなく入洛奉迎が行なわれた背景には、時の摂政兼家や実資の後援によるところが大きかったのである。

『小右記』には、実資と齋然^④、義藏^⑤が密接な間柄にあったことを示す箇所が多くみられる。般若寺にしても実頼以来の関係で実資は後援しており、齋然の愛宕山清涼寺建立の事業に対しても同様だったといえるのである。

五

齋然が志した愛宕山清涼寺建立の事業は、結局、成就しなかった。齋然が義藏と立誓した現当二世結縁手印状の具現化は、成就することなく終わったのである。

さてこのことは、齋然が後援の頼みとした東密教団の元果と摂政兼家そして義藏の死にも、密接な関係がある。愛宕山清涼寺建立の事業が本格化しようとした時に、元果、兼家、義藏を相次いで失ったことは、齋然にとって大きな損失であったに相違ない。

のち齋然の遺志を継いで弟子盛算が、愛宕山麓の栖霞寺内に五台山清涼寺をつくった。その過程やその後の展開については、齋然とその弟子たちを後援した実資を中心とする勢力と反対勢力としての道長の対立という視点を以て、問い直す必要がある。この点、今後の検討すべき課題としてのこしておきたい。

註

- ① アンヌ・マリ ブッシー「愛宕山の山岳信仰」(五来重編『近畿霊山と修験道』所収、山岳宗教史研究叢書第十一巻、一九七八年)。
- ② 『釈家官班記』。
- ③ 『日本三代実録』貞観六年五月十日条。
- ④ 『日本三代実録』貞観十四年十一月廿九日条。
- ⑤ 『日本三代実録』元慶三年閏十月廿四日条。

- ⑥ 『平安遺文』第九卷、四五六五号文書。
- ⑦ 慶保胤「齋然上人入唐時為母修善願文」(『本朝文粹』卷第十三願文、所収)。
- ⑧ 森克己「日宋交通と末法思想的宗教生活との連関」(森克己著作選集第四卷『日宋文化交流の諸問題』所収)。
- ⑨ 『新訂増補国史大系』第二十九卷下、三三四ページ。
- ⑩ 『梁塵秘抄』。
- ⑪ 『小右記』の引用は『大日本古記録』による。
- ⑫ 佐々木令信「『小右記』僧名索引」(『仏教史学研究』第九卷第二号、一九七七年)。
- ⑬ 寛空に関する主な史料は、『大日本史料』第一編之十三、三八八―四〇八ページに集成されている。
- ⑭ 『新訂増補国史大系』第十一卷、七九ページ。
- ⑮ 『仁和寺史料』寺誌編一、三九二ページ。
- ⑯ 『大日本仏教全書』第一〇三卷、六六二ページ。
- ⑰ 塚本善隆「清涼寺釈迦像封蔵の東大寺齋然の手印立誓書」(『仏教文化研究』第四号、一九五五年)。本稿は、故塚本善隆先生の学恩によるところが多い。記して謝意を表したい。
- ⑱ 『日本歴史大辞典』第六卷、藤谷俊雄氏稿。
- ⑲ 西岡虎之助「齋然の入宋について」(『(三)』『歴史地理』第四十五卷第二、三、四号、一九二五年)。
- ⑳ 寛静に関する主な史料は、『大日本史料』第一編之十七、二二七―二四一ページに集成されている。
- ㉑ 『仁和寺史料』寺誌編一、三二七ページ。
- ㉒ 元果に関する史料は、『大日本史料』第二編之二、二七七―三三三ページに集成されている。
- ㉓ 『祈雨記』寛和元年七月条。
- ㉔ 東寺観智院蔵。
- ㉕ 佐々木令信「空海神泉苑請雨祈禱説について——東密復興の一視点——」(『仏教史学研究』第十七卷第二号、一九七五年)。
- ㉖ 角田文衛「般若寺と道綱の母」(『王朝の映像——平安時代の研究——』所収、一九七二年)参照。
- ㉗ 『新校群書類従』第六卷、二二六ページ。
- ㉘ 『覚禪抄』。
- ㉙ 註^㉖。
- ㉚ 寛縁に関する主な史料は、『大日本史料』第二編之四、六〇六―六一三ページに集成されている。
- ㉛ ほかに『小右記』永祚元年正月廿三日条、同年五月十三日条など。
- ㉜ 『山城名跡誌』。
- ㉝ 京都清涼寺本尊釈迦如来仏像胎内文書「齋然繫念人交名帳」。
- ㉞ 『小右記』永延元年六月八日条。正暦元年七月七日条、同日八日条など。
- ㉟ 『小右記』永祚元年八月十一日条、正暦元年七月六日条、同日七条、同日八日条など。